

硯 滴 考

[17]

令和六年九月吉日

公益財団法人

大平正芳記念財団



硯
滴
考

[17]



はしがき

猛暑の夏が過ぎ、やっと秋の安らぎがおとずれてきたようです。

この度『硯滴考』17号が出来上がりましたのでお届けいたします。毎号の温かいご支援に感謝申し上げます。

前号に引き続きご高覧・ご高評のほど、お願い申し上げます。

令和六年九月吉日

公益財団法人大平正芳記念財団

理事長 大平 知範

目次

はしがき	3
闘争とその解毒	6
大臣と役人	10
自民党の政策と主張	14
歴史と青年	18
山水を楽しむ	20

大平さんを偲ぶ 中曽根 康弘……………25

小粥正己氏（元大平蔵相秘書官）に聞く
健全財政へのこだわり ——聞き手・阿部 穆……………29

福川伸次氏（元大平首相秘書官）に聞く
総理大臣の思索と言動 ——聞き手・阿部 穆……………54

闘争とその解毒

昭和34年6月26日執筆。『春風秋雨』（昭和41年10月）に所載。派閥といえ
ば自民党が槍玉に上るが、野党その他あらゆる集団にも共通する「派閥
的動物である」人間の性^{さが}だ、とする大平リアリズム論。その心は、きれ
いごとの派閥解消論でなく、骨肉の争いの「闘争」の弊害の「解毒」に
尽きるとして、その処方箋について論じている。後に『全著作集』2巻（講
談社）に収録。

例によつて難産だった内閣改造「昭和三四年六月一日、第二次内閣改造」も昨日でケリ
がつき、今日の東京はドンヨリとした梅雨空であるが、昨日まではげしい政争の跡を忘れ
でもしたかのように、初夏の風が静かに流れている。

政争は本来、政党間の争いであるべきはずであるが、同じ政党の内部における骨肉の争い
というものがあり、事実またそのような形における争いが政党間のそれよりも深刻であり、
激しくもあることがある。このことは一見理解に苦しむことである。国民の多くは、かかる

争いにあるいは無関心であったり、あるいは冷淡であるかであろうが、嫌悪や痛憤を禁じ得ない方々も少なくないと思われる。いやしくも国民の選良たる政治家が、この体たらくではいけない。政治家は一身を国家と国民に捧ぐべきものだ。そしてこういう高い倫理水準を選良たる政治家に期待するのは、いわば当り前のことであるという前提が、この嫌悪や痛憤の裡にあるわけであろう。そのことについて、私は何も三島由紀夫さんの不道德教育講話を真似るわけでもないが、未熟な政治家の一人として、少しばかり逆説的な臭味のある感懐を洩らさせてもらいたい。

第一はおよそ人間というものは、本来、派閥的動物であるということである。自民党ばかりでなく、社会党においても共産党においても抜き難い派閥があり、総評や日教組等の団体においても、然りである。そればかりか、実業界にも、教育界にも、芸能界にも、学界にも、さらに神や仏に奉仕する聖なる宗門の世界にも、それぞれ特有の派閥というか流派というものがあつて、はげしくしのぎをけずっている始末である。借老同穴を誓う一身同体の夫婦の間においても、冷戦もあれば熱戦もみられる。これが人間の世界にまつわる、どうしても払拭し難い原罪のように思われるほどである。してみれば、政界だけが独りその圏外に立つ、争いのない浄土であり得るはずもなかるうではないか。そういう立論も成立たないこと

ではない。

第二に、権力の争いというものは、相手方の自由ばかりでなく遂にはその生命をも葬るところになった事例は、歴史が示すところでもあるし、現にこの地球上でも間々行なわれているところである。その観点からみると、いかに激しくても今日の政争というものは、そのようなきびしいものではない。同時にその争いの様相——その是非はともかくとしても——は、いちいち国民の前に刻々報道され、その批判の対象になつておる。いわば今日の政争は、その限りに於いて昔のそれや独裁国のそれとは、程度や様相を異にしておる。

そうはいうものの、われわれとしてもこの忌むべき政争を排除して、政界にできるだけの平和と協力の精神をとりもどしたい念願をもつておる。しかし、それは単なる祈りであり悲願であるだけでは、結実をみることにない感傷に終りかねない。われわれは、この悲願をもつ以上は、そしてその結実を自分のものにしたたいと念願する以上は、この争いの緩和なり鎮静化なりについて、実行可能な処方箋をもたなければならぬ筋合いである。単なる痛罵や義憤をもつて事足りるとしてはいけない。

この課題は、しかしながら、大変むつかしいことである。ただここでは、その一つの手がかりとして、この課題の解決に接近する一、二の提言を試みてみたいと思う。

その一つは、その集団内のコミュニケーションをできるだけ拡げてゆき、その風通しをよくすることである。それはその成員間に理解と同情を増すことになるものである。その面で新聞その他マスコミの果たす役割は大きい。何事も包み隠すことなく真相を取材し、それを正確に万人の前に報道する自由をマスコミはもっておる。もちろん報道の自由は一面かかる争いを刺激したりそれを激化したりする作用をもつてはおるが、少なくとも闘争の発酵を阻み、遂にはその緩和と鎮静をもたらず作用をもつものであるということである。

その二は、その社会的集団における権威の確立ということである。これは民主主義体制の盾の半面をなすものであるが、この権威から出てくるところの指導力というものが確立されなければ、闘争という病源体の活動を殺すことができないばかりか、その活力を増すことにはさえないということである。ただその権威は、一方に偏しない無私のものであり、人間性と道理に徹した賢明なるものでなければならぬことはもちろんである。政党においては総裁その人が、自分の坐っている椅子に内在するところの自覚と責任に徹して、山が崩れてきても動じないだけの強靱な意志力をもって事に当る心術をもたなければならぬ。たいていの闘争は、この指導力によって解消ないしは緩和されるものである。這般（しやはん）の消息は家族、地域団体、結社、その他あらゆる集団にも共通のものではあるまいか。

大臣と役人

昭和31年1月1日執筆。『春風秋雨』（昭和41年10月）に所載。政治家の心得として、座右の銘である「一利を興すは一害を除くに如かず」を引いて、

新任大臣のあるべき心構えを提言。後に『全著作集』2巻（講談社）に収録。

公務員制度や行政機構の改革ないしはその簡素化とか能率化とかをうたうことは、歴代内閣の施政方針のおきまり文句になってきたが、それに手を染めて見るべき実効を収め得た内閣は未だかつてなかったといっても過言ではない。一体これはどうしたことであろうか。一考に値する問題であるにちがいない。

歴代の大臣というものは、役所の主人公であって事実上主人公ではないところ、その秘密が隠されているように思われる。ずっとその役所に所属し、そこに生涯の浮沈と運命を託しているのは、その役所にいる役人衆であって大臣ではない。主人公たる大臣は栄光をになつて登場してくるが、やがてはその役所とは縁なき衆生になつてしまふ存在である。大臣は主人公たる虚名をもつてはいるが、事実はその役所の仮客にすぎない。

仮客である以上は、大臣が自分の運命をその役所に託するなんていうことは途方もない見で、大臣になるほどの世渡りの上手な人であれば、そんな馬鹿なことを考える人は一人もない。従つて彼はその在職期間中、なるべくにくまれずにやりたい。さらには物判りのよい大臣として、役人衆に親しまれなくなるに決まっている。もつと進んでその役所の権限や予算、さらにはその定員を殖やすことによつて「政治力のある大臣」として高い評価をうけ、畏敬をも受けたいという野心をもつとしても、少しも不思議はないはずである。

そういう立場とメンタリテイをもつた大臣に、大きい改革を求めるのは、求める方が無理である。大臣は、いつの間にか、その役所の利益の代弁者になつてくる。はじめのうちは、政治家らしい改革意図を失わなれどもりで氣負つていても、やがて彼は身心ともその役所のミイラになつてしまふ。自己の運命をかけた役人衆と、かりそめの客人たる大臣との相撲は、勝負がはじめからついているといつてもよい。

そんな大臣では天下の大事を託するに足らない、などといつて悲憤慷慨してみてもはじまらない。大臣もまた平凡な人間であるからだ。役人衆は公僕なのだから、国民の利益のために大臣の命令のままに随順すべきであつて、時の政府の大方針を曲げたり阻んだりするのはいけない、といきまいてみるのも愚かである。自分の名誉と生涯の運命を賭けた役所の存亡

に、役人衆が無関心であるはずがないからである。役人衆もまた平凡な人間であるからだ。だから、私の大臣に対する提言はこうである。もともと公務員制度や行政機構にまつわる大きい改革意図などはお持ちにならない方が無難であるが、その改革意図をふり回すなどということはなおさら危険であるということである。ご自身に危険であるばかりではなく、大きくいつてお国のために無益であればまだしも、有害である場合が少なくないのだということである。

それではいったいどうすればよいのだと反問される大臣がありとすれば、私は率直にお答えしたい。昔、蒙古の名相は「百利」「一利」を興すは一害を除くに如かず」という不朽の嘆声を洩らされた。除くべき一害は大臣に成り上つたような貴方であれば、大臣室の机の上に無数にころがっているはずだ。身辺に無数にころがっている害毒や非能率を見ぬくほどの眼識が、その人に備わっていないというのであれば、そもそもその人が大臣になったのが間違いであったことになりはしないだろうか。国民は百利マを興すことに汲々たる大臣よりは、一害を除くことに心胆をくだいてくれる大臣を求めておるのである。国民のために百利マを興すべく発心して努力してみても、その結果はほとんど例外なく役所の権限と予算の増加を来すことはあつても、国民の生活に資するところは乏しく、ひよつとすると国民の生活に余計な

制約と負担を来すことになりかねないからだ。

自民党の政策と主張

『自由新報』昭和43年1月5日掲載。『硯滴』（昭和4下期）所載。本稿冒頭の自民党の国民党たる所以の定義づけは、自明のことだが千鈞の重みがある。戦後史の中で、それに当てはまる政党が寡聞にして他には見当たらないからである。それだけに、その目的のための「自民党の政策と主張」のエッセンスを論じた本稿は、内外益々厳しい政治経済情勢下にあつて、より一層時宜を得ている。現下の自民党への頂門の一針である。

後に『全著作集』2巻（講談社）に収録。

自由民主党は、もともと国家と国民に対し重い責任をもった国民党として、わが国の平和を守り、国民の自由をよう護しつつ、国家と国民の繁栄をはかることを基本の目的としておることは申すまでもありません。

そしてその時々々の状況に応じて、その施策に重点の置きどころを考えなければならないことも、これまた、当然であります。

平和が脅威にさらされる場合はもとより、世界があげて平和をおう歌する場合においても、われわれは国の安全を保つために、不断に周到な注意と用意を施す責任があります。国民の自由が公然と侵される危険がある場合はもとより、それが隠微の間に侵されるおそれがある場合においても、われわれは注意深い対策を用意する責任があります。国家と国民の繁栄を願うことは当然であるが、繁栄をささえる条件とかそのために支払うべき代価を、時に応じてあん配組織する責任があります。いわばこれらのことはわが党の政策の立案と実行に当たつての当然の心がまえであります。

平和を守るためには、それ相当のきびしい代償が要求されます。平和のために支払わなければならぬこのきびしい代償がともすれば看過され、安易に走りがちであることは現前するわが国の実情であります。かかる国民意識を、正しい軌道に乗せることが、今は強く要請されております。国の防衛と安全を保障するいろいろな条件を、広く深く究明し、真剣な論議を繰りひろげ、それを通じて国民的なコンセンサスを地道につくり上げる政策的努力が、当面われわれの任務になってまいります。一九七〇年にとらなければならぬわが党の態度も、より安定した国民的コンセンサスにささえられたものにならなければなりません。

自由はエゴイズムや放じゅうであつてはなりません。他人の自由を尊重すると同時に自分

の自由の主張に節度をつけることによつて、はじめて自由の体制は維持できるものであります。そのきわめて当り前のことが、公然軽視ないしは無視されておることも、われわれが日常経験する事実であります。わが党のすべての政策と立法は、かかる基本的秩序の擁護と確立の上に打立てられなければなりません。自由に対する脅威を地道にかつ精力的にとり除くことが、当面、わが党の最大の責任であります。そしてそれは力によつてではなく、国民の自覚と理解のもとになされなければなりません。

繁栄は、もともと独走できる性質のものではなく、それをささえる諸条件を整えることによつて、はじめて期待できるものであります。その条件の中には、もとより国内的なものもあれば、国際的なものもあります。またその場合、むやみに前進するばかりが能ではなく、踏み止まつてこれまでの高度成長の足元をかためることもたいせつであります。当面、わが党にはかかる条件の整備に柔軟な賢明さが要求されております。国際的良識の期待にそつた財政経済の節度ある運営によつて、国際的信用の維持向上をはからなければなりません。内にあつては政府与党みずからの姿勢の正しさと自信と緊張に裏付けられたその政策的態度こそが、国民のよるべき道標になり得るのであります。いたずらに軽薄な人気におもねることなく、わが党は重い責任をもつた最大の公党として、みずからの主体的眞実性を貫かなければ

ばならないと信じます。

歴史と青年

昭和44年9月1日「善通寺青年会議所認証伝達式に寄せて」の論稿。高杉晋作と吉田松陰が明治維新の先覚者として身命を賭したのは20代の若さだった。その歴史になぞらえての時代の変革期における青年の社会的実践の在り方を論じている。後に『全著作集』2巻（講談社）に収録。

日本では、儒教的な倫理の影響があつてか「長幼の序」というものが、社会の隅々にしつかりと根を下しておる。もとより、いつの時代にも「下剋上」ということが見られないわけではなかった。また既成の秩序に対する反撥がなかったわけでもない。最近の三派全学連等の動きはその典型的なものであるう。ところがそういう動きが奇矯なものとして特に目立って見えるということ自体、その底に「長幼の序」という倫理が、社会秩序の軸として生き続けている証左であるといえよう。

一方、時代の変革期において、その変革を実行したのは「長幼の序」の上層にある分別高き老人といわんよりは、一見無鉄砲に見える青年であつたことは興味あることである。高杉

晋作が死んだのは二十六歳であり、吉田松蔭が獄死したのは二十九歳であった。そしてこれらの先覚のいわば無鉄砲さが明治の維新の基礎をきずいたといえる。

もとより「長幼の序」は社会秩序の基本として守らるべきものである。高杉や松蔭はこれを無視した訳ではない。否、彼等の行動は、社会の至るところに停滞と腐敗が生じ、安逸と弛緩が生れ、本来の倫理が形骸化し、本来の倫理が真に生きた秩序として機能することが阻まれていた状態を打破しようとしたものと思う。

青年は経験や学識が豊かであるとはいえないが、その感覚は鋭く、新鮮である。正邪、真偽の判別において鋭敏である。これは青年の特権であり、それを社会的実践に生かす勇氣をもつことは青年の社会的な義務でもある。青年の社会的実践は、そういう感覚と真実と勇氣によつて貫かれていく限りにおいて貴いものであり、それがそうした折目を失い社会に甘えたものになるとその生彩を失うものである。

私は、青年会議所の精鋭諸君が、その社会的実践において、高貴であり、勇氣をもち、且節度をもたれることを希求して已まない。

山水を樂しむ

高松高商大阪支部の同窓会誌『大阪又信会報』第12号（昭和50年3月21日）に掲載。「山水を樂しむ」とのタイトルからは想定外の難解なseinとsollen論。その心は「seinの論理の筋金を通してこれをsollenの倫理でくるむことである」と論じている。後に『全著作集』5巻（講談社）に収録。

「経済学は囚はれたり。之を捕ふるもの名は、時に倫理ととなへ、時に予言と称し、時に又政治と云ふ。其名こそ如何ともあれ、赫として燃え上る赤き理想sollenの炎が、冷たかる可き現実seinの青き色を焼きつくさむとするに於ては一つなり。一故に曰く経済学は囚はれたり」と

これは、大正二年世に出た大西猪之介氏の著書『囚はれたる経済学』の冠頭の言葉である。私は学生時代、同氏の文明批評とともにこの本が気に入った。大内兵衛先生もこの本の文章に魅せられたとどこかに書いてあったが、大西氏の愛弟子大泉行雄先生も必ずや何度も読まれたにちがいなかろう。尤も私は、その主張に賛成したということよりも、その行文

の格調の高いところに惹かれたものだ。暖色と寒色の絡み合わせ、理想と現実との両面が潮の満干の波頭に青と茜の残影となつて照り映えているに似た描写が奇妙に私の感傷を誘つたからであろうか。

現実とは、何時でも、何処でも、冷たく厳しい。救いも赦しもない赤裸の事実である。人間は、それからどうしても回避できない。かなえられそうもない理想に幽棲して僅かながらでもこのきびしい現実からの散策に出ることが、囚虜の解放のように思われなくてもない。強気の *sun* が、弱気の *solon* の陽炎の中に揺らぐことを、何故逆に囚われたものと思えるのであろうか。

学というものは、論理を組み立てたり体系を整えたりすることである。そのこと自体が大の格子の中に囚われることである。一徹な主義主張に嚙りついて脇目もふらない人々は、どうみても囚われ過ぎているように思える。囚われないで野山を高く低く気ままに飛び廻れる姿の中に学はない筈だ。又現実とは、遊びや隙間のない恐ろしい芸術品である。何の言葉を挿む余地もなく、どう動かしようもないものであると思われる。それなのに、どうして、そのような絶対が囚われたものでないというのであろうか。

若かりし日、私は、この流麗な文章に含まれた思想にそういう意味で首をかきあげたことも

ある。しかし、それもつまりは、政治や倫理や予言に対して、不純なためらいや媚を見せない直立の姿で、学としての冷厳な孤高を守ることだろう。そう思つて、気楽に詩歌を口ずさむ形で何回も読み直したものだ。

其後、私も段々と馬酔を重ね、適当に世間ずれがしてきた。柄にもなく、政務にたずさわつて長くもなつた。そうなつてみると、若い時のこの疑問は、もう少し月並みの褪せた色調を帯び、世俗的な韻律を伴つて次第に膨れ上つてきた。それは、私が政治に首をつつこんで身動きさえ不自由な現実の色々の課題をどう解きほぐし、これを新しい課題にどう結びつけるかということに明け暮れているからであらう。『囚はれたる経済学』の著者が、忌み嫌つた理想の模索や、倫理への憧憬や、更には予言への執着なくしては、所詮、活力も出ず、浮ぶ瀬もないという状態にあるからでもあらう。

大西氏は、学者の一途の存念から、理論が政治や政策の魔手の俘になることを嫌つた。しかし、政治や政策には、一貫した原理や幅広い理念の裏打ちがないと、それは、流砂の中の川のように無力なものになつてしまふ。同氏は理論の弧節が揺れて *sollen* の誘惑に溺れることは、*sollen* に囚われるという意味で邪道であると考えられた。けれども、客観的な事情の新しい展開に意を用いないで、強固に節義を守り通すこともまた *sein* にこだわり過ぎ

た無明のそしりを免れなくなるにちがいない。

政治や政策は、「水を楽しむ知者」と親しみ、同時に「山を楽しむ仁者」とも和するところがないと成功しない。水を楽しむのは、世の移ろいにより添って、流れる水を追う如くに、夢とうつつとを編み合わせることで、言わば、sollen の虜囚になることである。山を楽しむのは、世の移ろいにかかわりなく、動かない山の姿を仰いで論理の筋を不動に据えることで、言わば sein の下僕となることである。

人々が出づるに戸による通常の筋道を守り、行くに徑こみちに由らぬ大道の直線を辿って論理の背骨を正さないと世の中は佝僂になる。同時に花が開き、鳥の啼く倫理の糸をたぐる心掛けを忘れると世の中は、病いに悩むことにもなる。

世の中が乱れたり、騒々しくなると、政治は sollen に囚われて空回りするか、sein の倅となつて、あがき回ることになりがちである。政治を肉の厚いものにすることを要求する人々もまた同じように sein の掌の上を駆け巡って sollen の紫の燿映を求めようとしなくなるか、sollen の光芒に目が眩んで sein の結び目に躓すづくものが多くなる。

今の世の中で大切なことは、政治にも生活にも学問にも思想にも sein の論理の筋金を通して、これを sollen の倫理でぐるむことである。これは、政治の仕事でもあるが、それに

もまして何よりも先ず各一人一人の仕事である。これは、同時に、政治の人々に対する甘えを取り去り、人々の政治に対する凭れを拭い去ることである。これなくして麗わしく定着した天地の創造はあり得ないのではなからうか。

大平さんを偲ぶ

中曾根 康弘

『大平正芳回想録―追想編』（大平正芳回想録刊行会・昭和56年）所載。

中曾根 康弘（なかそね やすひろ） 1918年〜2019年、群馬県出身、衆議院議員、内閣総理大臣（第71・72・73代）。大平政策研究会の九つの提言とそのブレーンを継承していただくとともに、「戦後政治の総決算」を掲げて日本国有鉄道など3公社である国鉄、電電公社、専売公社を民営化、J R、N T T、J T が誕生した。

正直に言って、私は大平さんとそう親しい間柄ではなかった。役所も大蔵省と内務省であるし、派閥の源流もどちらかといえば、主流派と野党派の垣根があった。佐藤内閣の末期から一緒に仕事をするようになり、外務大臣、通産大臣として日韓大陸棚石油開発協定を協力して仕上げたりしたし、また、第一次石油危機の際には、アラブ寄りを主張する私と米国を大事にする大平さんと対立したこともあった。

しかし今から思うと、田中内閣ができ、外務大臣に就任してから、大平さんは次第次第に国を背負う政治家としての雰囲気と王道を歩むステイマンシップをすっかりそなえてきたように思う。落着き、自信、諦念と闘志と活力と一念が美しく織り成して、その人柄にいぶし銀のような光沢を持ちはじめた。それは、とても私ごときが及ぶことのできなかつた人生の裏表に徹した高次の世界にすわり込んでいたようである。この頃から、求道者としての影がさらに強く射してきた。日中航空協定や財政処理であえて泥をあびることをいとわなかつた。男子の本懐を悟られて、不惜身命の域に達せられたのであろうか。『落日燃ゆ』であったのであろうか。

私は、総理になった大平さんと数回二人で静かに話し合ったことがある。その時に私はこう申し上げた。

「およそ一国の宰相になるということは、天命が下りたということです。その天命が何であるかは、その宰相自身にしかわからないと思う。それが何であれ、あなたが自分の直感でその天命を知り、その天命を果たそうときは、無条件であなたを支持し協力したいと思えます。ただし、筋の通らないことには反対しますよ」

大平さんはそれを聞いて、はじめは私の発言の真意が解しかねるふうであったが、やがて

ニッコリ笑って握手された。例の四十日抗争の時には、正直に言って、私は自ら出したこの言葉に非常に拘束されていた。今から思うと不幸なことであつたと思う。

大平さんは「鈍牛」といわれたが、それは側近がつけたPR用のあだ名であつた。実際は聖牛であつたと思う。良心の放射能をあびて、常に自分を反省し、自分をさいなんできた求道者であつたように思う。お互いに政治家であるから、ゴルフでいえばOBラインすれすれのところまで球が行くこともある。その時に良心の痛みを感じて、すぐフェアウェイに球を戻すという性格の人だつたと思う。私などは、その点大平さんなどよりルーズな性格だ。大平さんはよく本屋に行つて本を買い、ときどき英語の単語を使い、たまには讚美歌を歌つたというが、私たち同時代人は、よくそのことに感情移入できる。お互いに若干キザだと思われる言動があると思うが、戦前の学生時代に仕込まれた教養主義、理知主義の産物だからしかたがない。しかし、うらやましいことは、大平さんの場合、それがぎらつかず、人間的な皮膜で包まれていたことだつた。茫洋とした非都会的な味がぎらつきを消していた。そして常に温和な瀬戸内の微風を漂わせていた。

人間の評価は、棺をおおうて定まるといわれている。その意味で時は人の審判者でもある。その時を自ら設定する人もいる。三島由紀夫氏がそうであつたらう。大平さんの場合

は、自然に劇的に舞台が整えられていた。大平さんは、神の恩寵を最も受けられた方となつた。

大平内閣の新政策策定のために集まった人々は、環太平洋問題や田園都市問題や総合安全保障問題や家庭基盤整備問題などを勉強し、大平精神を体して日本を逞しく前進させていくに違いない。一粒の麦は、永遠の存在となったと思う。

小粥正巳氏（元大平蔵相秘書官）に聞く

健全財政へのこだわり

——聞き手・阿部 穆

『去華就実』（大平財団・平成12年）所載。

平成12年1月12日日本政策投資銀行総裁室で取材。

思いもかけぬ「蔵相秘書官」拜命

——大平さんが大蔵大臣に就任されたのは、昭和四九年（一九七四年）の七月です。田中（角栄）内閣で福田（起夫）蔵相が辞めて、その後を引き継がれた。それで次の三木（武夫）内閣でも再任されて三木内閣の最後までやるわけですね。小粥さんは、その最初から最後まで蔵相秘書官をおつとめになったわけですが、それまでに小粥さんは大平さんとかで接点があったのですか。

小粥 いいえまったくありませんでした。秘書官の内示を受けた時は、私が東京国税局の間税部長という仕事に出ていた時でしたが、私は三年に大蔵省に入者しましたので、四九年といえますと十九年目ですから、大体、年頃からいうと本省へ帰って、一番軽い課長ポストを仰せつかるといふ頃の頃でした。なお後から考えると偶然なんです、東京国税局間税部長というのは、大平さんが池田勇人さん（東京財務局長）から請われて就かれたポストなんです。税の仕事としては大平さんは、最初に横浜の税務署長をやられて、それから仙台税務監督局の間税部長になったのですが、そこで「どぶろく退治」に関して、権力者と治められる側との関係についての大平さんらしい考え方を後に披瀝されています。

——その「どぶろく退治」の話と、この話を少しご説明下さいませんか。

小粥 間税部の仕事というのは、酒税を含む間接税全般を扱うのですが、当時、その仕事の大半は、農村における「どぶろく」の密造を取り締まることでした。それはきちんと税金を払わなければ酒を造ってはいけなく、という税法上の建前があつたからです。ところが「どぶろく」というのはもち米に麴を混ぜれば簡単にできるものだそうで、農村ではあちこちで造っている。それを税務当局が密造酒として摘発して、何がしかの罰金をとり、始末書をとって取締る。一種の警察的な仕事をするわけですね。しかし、密造酒というと何か非常

に悪いことのようにだけでも、当時の東北農民からすれば、自分で飲むだけの分を造るのが、そんなに悪いことですか、ということになる。そこに、大平さんの心の痛みがあつて、税金を取る側と取られる側、その両方の立場をじっくり考えて見ようという大平さんの、いわゆる楕円形の思想を、そこに見ることができません。

——なるほど。それで最初の質問に戻りますと……。

小粥 私も大平さんが、大蔵省の先輩であるということは、知っていましたし、新聞で顔写真は拝見しておりましたが、大平さんに直接お会いしたことはないし、ましてお話ししたことなどありません。それで「これはエライことになった」と思いました。私はもちろん秘書官の経験ありませんでしたし、自分ではとてもそんな仕事に適しているとは思えないので、内示の直後、大蔵省の先輩に挨拶に行きましたときに、「私でも勤まるでしょうか」と聞いて見ましたら、「大平さんという人はいい人だから、とにかく誠心誠意仕えれば、こわいことないよ」と励まされました。それから秘書官の経験のある別な先輩には「秘書官をやるんなら大物の秘書官のほうがいいよ」と言われましたが、私はその意味がよくわかりませんでした。つまり大平さんが大物という認識もなく、まったくの政治オンチでした。しかし、とにかく外務大臣をやった方が大蔵大臣になられたんですから、重要人物に違いないと

は思いながら、「あの人は大派閥の領袖で、政治家として大物なんだよ」「ああ、そうなんですか」という、その程度の認識でした。

——その時に、大平さんは図らずも大蔵大臣を引き受けるわけですが、大蔵省を退官されたのが昭和二十七年ですから、二二年ぶりくらいで大蔵省へ戻ってくることになったわけですね。（大平さんは）「まさか俺がここに帰ってくるとは、この主人公になるとは思ってなかったよ」というようなことを、しきりに私たちに申されておったですね。それで、ご本人は、その時どんなふうな感じだったのですか。

「図らずも」貧乏くじを引いた蔵相就任

小粥 大平さんがその時おっしゃった言葉は、決して韜晦ではなくて本心でもあったと思います。つまり大蔵大臣というのは、ある意味ではたいへん晴れがましいポストでもある。自分がそこへ、古巣である大蔵省へ大臣として戻ってきた。それは、たまたま福田さんが辞めたというハプニングによるもので、後任適格者はいろいろな意味でもう大平さんしかいなかったという政治的な状況があったのでしょうけれども、大平さんとしては「まさかー思い

「がけず」というのは、まさに「図らずも」であり、その時の実感は、お言葉どおりであったでしょう。それから時期がたいへん悪い時期でしたね。昭和四九年の七月は、第一次石油ショックの最中で、物価が高騰する一方、企業の収益が急速に悪くなって、税収が激減していました。この事態に対処するため大平さんは苦勞を重ねた挙句、結局二年目にはご自分のもつとも嫌いな赤字財政を運営せざるを得なくなりました。「えらい時期に引き受けた」というのは、まさに本心だったでしょう。

ところで大平さんが政界に出られて間もない昭和二八年頃に書かれた『財政つれづれ草』の中で、大蔵大臣の職について論じたものに、「世の中に貧乏くじを引くという言葉があるが、まさにこれは大蔵大臣にあつらえ向きの言葉であろう。（中略）誰も自ら進んで引きうけてよいような生易しい仕事ではない。出来得べくんばお断わりしたいポストであろう。また進んでやってみたいという人にはやつてもらいたくない仕事（ポスト）であり、どうしてもいやだという人こそ、三顧の礼をもってこの公職に迎えなければならぬ重職であるといえよう。」と記しておられます。これは私と富沢宏秘書官が書きました「大平総理の財政思想」に引用したもので、「当時、予想しておられたかどうか、後年、御自身がまさにこの通りの立場に置かれることとなった。」とも書いておられるとおりです。まったくこれは、当時の

大平蔵相の心境を如実に表現していると思えますね。

——それから「樺櫨論」というのがありますが、それはどういうものですか。

小粥 これも大平さんがその『財政つれづれ草』に書かれたものですが、「櫨の木の養分が足りないときは、枝葉を切り落として樺櫨にしないと櫨の木は枯れてしまう。財政の困難に対してもこれと同じ様に不要の歳出（枝葉）を切り落とすことが大事だという趣旨である。『入るを計つて出るを制す』が、大平総理の財政についての基本的なお考えであったように思う。」と「大平総理の財政思想」に書いた次第です。大平さんの財政についての基本的な考え方というのは、赤字財政を排した健全財政ですし、したがって大きな政府はとるべきでなく、できるだけ小さな政府をめざすべしとされました。これは徹底しておられましたね。

——オイルショックの後、日本の経済は塗炭の苦しみを味わっているわけで、財政も逼迫しておるし、いろいろ借り換え勘定その他、毎日毎日やらなければならぬことが沢山あったと思うのですが、側で見ておられて（大平さんは）どんな感じだったですか。

福田・大平両雄の経済思想の対立

小粥 私がお仕えした二年半の間を通じて、大蔵大臣としての仕事は、おそらく楽しいこととは一つもなかったといつてよいほど厳しい環境でした。すべて苦しみだつたと思います。まさにおっしゃつたような客観情勢でしたし、特に三木内閣になりますと、福田さんが副総理兼経済企画庁長官として、自ら「全治三年」と称した日本経済の火消しと、立て直しのために乗りこんでこられました。事実、激しいインフレを抑え込んで経済を立て直しを図るため、いかにも福田さんらしい働きぶりを示されたわけですが、経済政策というのは当然、財政政策と重なり合うわけですね。福田さんは大蔵省でも大平さんより先輩であり、かつ自ら経済政策のリーダーという自負もあり、また、そういうことで内閣に迎えられてきたわけですから、お二人の関係はなかなか難しかったと思います。

福田さんと大平さんは、財政とか経済政策についての考え方が、当時の危機的な状況下です。基本的な物価（上昇）を抑えなければいけない、経済を立て直さなければいけない、という点では同じなんですけれども、具体的な手法においてはやはり当然、違つてきますよね。それで、福田さんは大平大蔵大臣の前任者であり、もちろん政治的な立場も違う。

ですから、私などは政治オンチですから、傍から見ていると分らないことが多かったですけど、やっぱり振り返ってみればそのことについて、関係者が書いておられるように、両雄の間で時に摩擦が生じるということは、当然あったと思いますね。福田さんが経済関係閣僚会議の主宰者ですから、どうしても財政運営についてもいろいろ注文をつける、大平さんが極めていい顔をしている——そういう局面が秘書官（の私）から見ても、ずいぶんあったと思います。お二人とも偉い大蔵省の大先輩ですけど、やっぱり肌合いい、物の考え方、あるいは経済、財政についての手法の違いは歴然としていましたね。

——田中内閣の終わりの頃というのは、半年ぐらいですか、ある意味ではたいへんばたばたしたような恰好で過ぎていくわけですね。そして、椎名（悦三郎）裁定があつて三木内閣になるわけですが、その頃、大蔵大臣としての大平正芳と政治家・大平正芳とは、行ったり来たりしているわけですけども、秘書官として側におられて、どんなふうな感じでしたか。

小粥 あの頃は、時間配分で言えば大蔵大臣でありながら、否応なしにもう半分以上、政治家としての動きをされていたと思います。そこは、もっぱら森田（一）政務秘書官が付いているわけですから、事務の秘書官は、その間は割合、暇だったですよ。それで、ああいう

経緯ですから、われわれは三木内閣で大蔵大臣を引き続きなされるといふことはないのじゃないか、と何となく思っていたのですが、結局、再任されました。その時に森田秘書官が、「再任を乞われて断る理由はないですからね」といふような解説を加えたので、「ああ、そういうものなのかなあ」と、その辺の事情にうとかった私は、それなりに納得したことを覚えていきます。

それにしても、秘書官の私はかなり大臣の身近におり、時にはロツジ風の借家（森村邸）の二階に上がり込んで政治記者の皆さんと一緒に朝食を頂いたりしていたので、大平さんの素顔がわかるのですが、どう考えても椎名裁定というのは、政治家・大平さんにとっては愉快なはずは全くなかった。どうも大平さんが、あの重要な数人の政治家のやり取りの中で、ちよつと外されて、事が決められてしまったみたいなことだったらいいですね。何となく、そういうことは門前の小僧でわかりますから、「大臣、さぞかしご機嫌が悪いだらうな」と思っていたところが、そういう時でも周囲の人に何かで当り散らすようなことは、およそなかったですね。「やっぱり出来た人というのは、こういうものかなあ」と感じしました。二年半の秘書官生活を振り返ってみても、申しわけないくらい伸び伸び仕事ができました。秘書官として実に仕えやすい人でしたね。後で考えてみれば大平さんは、郷里の大先輩の津島

(寿一)さんの秘書官を二度にわたってつとめられた上、さらに池田(勇人)さんの秘書官も二度やられており、まさに秘書官の大先達ですよね。秘書官としてのノウハウを全部、心得ておられるわけですから、気のきかない私などは「見ちゃおられん、何をやっておるか」と何度怒られても、ちつとも不思議はなかったわけですが、およそそういうことはありませんでした。まあ諦めておられたのかも知れませんが、やっぱり大人物だったと思います。

——話を元に戻しますと、三木内閣ができて、経済総理ということで福田さんが采配を振るわれるわけですね。そこで一番、問題になったのは、公共料金の扱いであったと思いますね。その時に、大平大蔵大臣は、ある程度の受益者負担ということを言われ、福田さんは公共料金の抑制ということを言われて、その調整に非常に苦労されたわけですが、大平さんの主張が通ったものもあるし、まったく通らなかつたものもあるわけですね。あれはどうだったのですか。

酒・タバコ増税法案の苦闘

小粥 大平さんの主張がある程度、通つたのは、何といつても酒、タバコの値上げです

ね。これが多分、一番大きな問題だったと思います。他は、大体、米価をはじめとして押えこまれたケースがむしろ多かったですね。結局、一般の公共料金については、主として抑制という福田さんの、主張が通った。ただし、大平さんは財政担当大臣として、野党の反対が非常に強い酒、タバコの値上げ——つまり増税——をたいへん苦勞をされた上で実現しました。何しろ最初、提出した値上げ法案は、国会でもさんざん難航した挙句、延長国会の最終日に、河野（謙三）参議院議長が選挙制度の改正法案を先行させた後、時間切れで流れてしまうのですよ。七月四日の真夜中の一二時ギリギリまで、酒・タバコ法案だつて選挙制度と同様に、可否同数でも議長採決で何とか成立させてもらえるものと、われわれは最後まで期待していたんですが、結局、河野議長の七分三分で野党に配慮するという議長哲学のために流れてしまったのです。担当大臣の大平さんとしては、まことに、残念極まりないことでした。文字通り、無然とされて真夜中の国会から、すぐに宏池会の総会に行かれてその状況を報告されたことを覚えています。なおその時、大蔵省の松川道哉官房長と中橋敬次郎主税局長に対し「君たちの小さな心を痛めたなあ」と声を掛けられた話を後に官房長から聞かされたことがあります。

—— 逆に三木総理ならびにその周辺は、選挙制度の二法案が通つたので、喜んでいまし

たね。

小粥 それに対して、大平さんは、国民に不人気な酒、タバコの増税を、誰も好き好んでやるものじゃないけれども、どうしてもやむをえない時には敢えてやらなければならぬのがステーツマンではないか、と主張されたのだと思います。その思いを敢えて口に出さないで、無然とした表情で、文字通り耐えがたきを耐えておられました。こうして一度廃案になったその酒・タバコ値上げ法案は、もう一度、その年の一〇月の臨時国会に提出され、最後は強行採決までしてようやく一二月に成立したのです。たまたまその国会審議の最中、ちょうど第一回サミットがパリ郊外のランブイエで開催されることになりました。当然大平さんも大蔵大臣として出席しなければなりません。そのとき私がお供したんですが、何と往復の飛行機に乗っている時間とサミット会場での滞在時間（前半だけ出席）がほとんど同じというひどいスケジュールでした。何故かというところ、大蔵大臣が帰ってこない、野党が酒・タバコ法案の審議をやってくれないというからです。そういう無茶な強行軍を大平大臣に願っていて、やっとのことで酒・タバコ法案が成立したという次第でした。

しかし、酒・タバコの増税は辛うじてできたけれども、一般の公共料金引上げは抑制され、さらに不況のために税収の落込みは厳しく、財政はいよいよ悪化して、結局、五〇年度

の補正予算で戦後初めて実質的な赤字公債を発行せざるを得なくなっていました。このことは、誰よりも健全財政を追求してきた大平さんにとっては、本当に不運なめぐり合わせであり、不本意極まることだったと思います。

——まあ、今日の財政を見ますと、あの程度の赤字公債だと思いますが、当時としてはたいへんなことだったのですね。それでアメリカをはじめとして、外国の中には日本が赤字公債に踏み切ってくれたから、世界経済の混乱もあの程度で済んだ、日本は良くやってくれた、と評価をする向きも当時はあったと……。しかし、国内としてはたいへんだった。

小粥 それは多分あったと思いますが、ただ、そこはなかなか難しいところです。国内としては景気が悪いものですから、政府が何とかしてくれなきゃ、この景気はとても回復しない、そこでもし、大平さんの本来の考え方どおりに、税収が入らないんだから、支出を抑えるよりしょうがない、さっきの棒擡経済論はまさにそうなのですが、そう言っていたんでは、たしかにその時の当面の景気回復にはならないわけですね。経済を縮小させてしまうわけですから。もちろん大平さんは硬直的な考え方の人ではありませんから、日本経済を救うためにはここはやむを得ないと決断され、結果として、大平さんがもつともやりたくなかった赤字公債を出して、つまりそれは国民からの借金ですよ、それで力ネをつくって公共投

資に廻すなり、他の支出に当てた。その結果、第一次石油ショック後の急激な物価上昇を何とか抑えながら、景気のある程度回復させることができたわけです。

ですから五一年一二月に三木内閣総辞職に伴い、大平さんが大蔵大臣を辞任された時の記者会見で、「赤字公債をあなたの時代にたくさん出したのを、どう考えるか」という質問に対して、「この転換期にあつては、こうするより選択の余地はなかった」と、きつぱり答えておられます。その後でも「まさにあれしかない。そういう意味では、自分は決してそのことを何時までもくよくよしていることはない、あれはその当時、正しい選択であつた。あれしかなかった。」ということは繰り返し言っておられたと思います。

——しかし、そうは言われたわけですけれども、大平内閣の時に一般消費税が出てきますよね。この時、小粥さんは主計局にいたのですか。

赤字公債脱却への責任感と「一般消費税」提唱

小粥 大平内閣が発足した時は、私は主計局で運輸郵政担当の主計官をやっていました。

——しかし直接の関わりはなかったかも知れませんが、（大平さんは）一般消費税という

国民にとつてはあんまり歓迎されざるものを掲げて、五四年の一〇月に総選挙をやるうとしたわけですよ。それで途中で引つ込めるのですが、結果的には自民党は負けるわけですよ。しかし「何でそんな選挙に不人気なものを出すんだ」という声が自民党の中からも、派閥（宏池会）の中からも出ていたにも拘らず、大平さんが出そうとするわけですね。あれはやっぱり、大平さんの心の底というか頭の中に、赤字公債というものがよろしくない、何とかして均衡財政に戻さなきゃいかん、というものがあつたんじゃないですかね。

小粥 それは、お尋ねの通りです。財政家としての大平さんの頭に、大蔵大臣辞任後、最大の宿題として残ったのは、止むを得ず決断せざるを得なかつた赤字財政の処理ということだったと思います。その赤字財政が、いよいよ大平さんが総理を受けられた時まで続いているわけですね。この宿題解決のメドは何とか自分の政権でつけておきたい、というのが大平総理の決意だったに違いありません。ところでこの赤字国債は、財政法上原則は禁止されている特例公債でありますから、一般の国債は六〇年で償還することになっているのに、大蔵相が自分からこれは一〇年間で償還するということを言われた。それから、特例公債法案という財政法の特例法案を五〇年度の補正予算の時に国会に提出したわけですが、それを赤字国債の発行が続く間は、わざわざ毎年提出することにした。実は法律のつくり方によつて

は、必ずしも毎年、出さなくてもやれないことはないのですが、それを敢えて毎年、提出して、国会の審議を受けることにした。これも、大平さんが特に指示されたことです。つまり例外的に赤字公債を出すのだから、そのつど国会の批判を浴び苦勞をしながら認めていただく、なるべく速やかに健全財政に立ち戻ります、ということではいけないという、これが財政家・大平さんの基本的な考え方であったと思います。

しかしその後も、なかなかそこから脱却できないのが実態でしたから、いよいよ自分が総理になって国政全般に責任を負うことになったこの時こそ、財政については何としても赤字公債脱却の道筋をつけておきたい、という思いが強まったと思うのです。そこで具体的な政策の打ち出しとしては、三木内閣以来、社会保障関係費が非常に増えてきましたから、それを含めて財政構造全般を見直して、支出をできるだけ切らなきやいけないということ、を、まず言われた。それから税については、課税の公平という立場から、極力、不公平税制の是正をして税収の確保を図らなければいけないと言われた。しかし、それでもなおかつ、どうしても足りない場合には、これはやはり国民の理解を得ながら増税をお願いしなけりゃならない、ということ、いろいろな表現で、繰り返し訴えられました。では、どうしても仕様がないうとして、お願いする増税の内容は何かという、それは従来のような所得税、法

人税中心の税制ではなくて、支出に応じて税を払ってもらう一般消費税の導入が、税制構造、税のバランスから言って望ましいんだ、ということのを主張されたのです。

——一般消費税については、大蔵省自体も検討していたのではないですか。

小粥 実は大蔵省は、ずいぶん前から将来の租税構造としては、どうしても一般消費税——ヨーロッパではすでに付価値税という名称で実施されてきました——を導入すべきじゃないかということを勉強していましたし、政府の税制調査会でもその方向の答申が出ていましたが、大平内閣の最重要政策として掲げられた「財政の対応力の回復——その手段としての一般消費税の導入」は、決して大蔵省が大平さんを説得して、そうしたんじゃないかと、大平さんの本来の考え方から必然的に出てきたんだと思います。まず国の財政のあり方として、「入るを図って出ざるを制す」にしたがって考えると、現状は入ってくるものより出るほうが圧倒的に多い赤字財政だから、それを何としても直さなければいけない。しかし、出るものをどう切りつめる工夫努力をしても、どうしてもこれだけ不足だとなったら、それじゃ入るほう、つまり税収のほうを何とか考えて行かなければならない。しかし所得税、法人税を増税することでは経済活力を殺ぐことになるし、税制全体のバランスから考えても間接税の増税しかないだろう。それを何とか国民に分かっていただいで実現しな

ければならない。難しいことを承知でそれをやるのが、自分に課せられた使命だというのが大平総理の結論だったということでしょう。

ただし、不人気は当然のことだ。だけどそれは、根気よく説明をして国民に分かってもらう、それが政治なのだ、それを敢えてやるのが真のステーツマンだ、というまったく大平さん本来の真摯な、ある意味では愚直な考え方から出てきた。そして国民は最後には必ず分かってくれる、という民意の賢明さに対する信頼が、大平さんには強くあったと思います。しかし、これは政治的な戦術から考えたら、ずいぶん危険であり、特に選挙前には決してとるべきでないということでしょう。だから党内は殆どみんな反対しますよね。そうであればよいよ自分がやらなくて誰がやると、一層そう考えるようになった。まして、総理という国政の最高責任者としたら、国民にもっとも不人気なことでも、自分の責任でお願いしなけりやならない、ということではなかったでしょうか。

——それは何でしょう。さつきおつしやつたように、大蔵省の先達であられる津島さんはじめ錚々たる先輩の下で薫陶を受けたからということなのか。それとも大平さん自身のフィロソフィー（哲学）といいますかね、何かがあったからなんでしょうかね。

大平哲学から生れた健全財政主義

小粥 私は後者のほうだと思えますね。もちろん大平さんがある年齢まで大蔵省で仕事をされた。それから池田さんはじめ大蔵省の先輩にいろいろ教えられた、その影響は当然あったと思いますが、それ以上に若い時から大平さんの頭に次第に形成されていった、やっぱり経済というものは、今風に言えば市場活力だけど、要するに民間が主体で、経済の活力がまずあって、それで政府はそれを支援するのはいいけれども、決して余分に介入してはいけません。政府の役割は、あんまり大きくなってはいけません。それから税というのは、さっきの「どぶろく論」の例にもありますように、やっぱり権力で税を取るということは、たいへんなことなんだ、したがって政治家にとつても、まず国民から取り上げる時の、国民の痛みというものを良くわきまえなければいけないという思いが、税の仕事がされた経験から、税の技術的な問題よりも、そういうことに大平さんの考え方は受け止め方が進んで行ったのだと思います。その上で財政を健全に運営するために、どうしても止むを得ない場合には、正面から情理を尽して国民に理解してもらわなければいけないという思いが、だんだんと経済思想あるいは政治哲学として、大平さんの中で熟成されてきたんじゃないかと

思うんですね。

ですから、個人の生活としても、まず金を借りて、たくさん物を買って、先行きのことはともかく取り敢えずは結構な生活をするというのは、もつとも卑しむべきことだ、という考えでしょう。ご自分でも「俺はケチなんだ」とよく半分、冗談に、半分、本気で言っておられた、その儉約思想も基本的には相通ずるものがあるに違いない。分不相応なことをすべきではない。それは国だって同じことだということです。

——池田さんの場合は、例えば下村治さんとか何人かブレインの方がおられたが、大平蔵相の場合は、そういうアドバイスをされた人はいたのでしょうか。

小粥 例えば最後まで身近におられた方では、新井俊三さんとか橋本清さんなどがおられますが、池田さんにおける下村さんのような非常にはつきりした特定の経済顧問的な人はいなかったと思います。しかし、東京商大（一橋大）における交友、あるいは経済界の人たちとの幅広いお付き合いの中で、大平さんの民間活力が大事だ、政府の役割はできるだけ限られたもので然るべきだという考え、それから財政は本来は均衡財政であるべきで、借金してでもというの、家計においても国においても本来はやるべきではない、という思想は自ずから作り上げられてきたものだと思いますね。そして、その思想は、大平さんの人間的な資質

の上に、次第にご自分で練り上げて行かれたものではないかという感じがします。

—— 総理大臣になられた後、政策研究グループをつくられて、環太平洋連帯構想をはじめ九つの構想を、大蔵省の長富（祐一郎）さんが事務方になって打ち出すわけですが、いわゆる経済とか財政についてのグループはないのですね。

小粥 そうですね。そういえばあの中には田園都市構想グループというのがありまして、梅棹忠夫さんが座長でしたが、私もたまたまそこへ参加させていただいて、お陰でいろいろな方々のお付き合いが広がりました。とにかくあれは大平さんがご自分でいろいろ構想を持っておられながら、自分で全部やるというよりも、できるだけ広く人の話を聞こう人の知恵を集めよう、また自分だけで考えられることは所詮、知れているんだという気持ちからですね。テーマはもちろん大平さんが関心を持つておられるものですが、むしろ経済、財政以外の分野に目を向け大平さんからこういうことで人を集めてくれということで森田さん、長富君がいろいろ相談して人選し、スタートしたものだと思います。あの方式は、その後、中曾根（康弘）内閣が引き継いだ感じで、それぞれのグループでたいへん勉強してもらったと思います。大平さん自身、決してお座なりではなくて、非常に忙しいのに、いろいろな研究会に出て話を聞くのを本当に楽しみにされていましたね。普通は審議会をつくっても総理は

お忙しいし、報告書を持って行っても、後で読んでおくと言つて、ちつとも具体化されないということが間々あるものですが、大平さんの場合、ああいう研究会で各分野のいろいろな考え方の人の話を聞くこと自体を、たいへん楽しみにされていました。おそらく、途中で倒れられるということがなければ、あの研究会の提言を大平さんは自分のものにした上で、できるだけ活かして行きたいと思つておられたに違いありません。

——小粥さんは、大蔵事務次官、公正取引委員会委員長、日本開発銀行総裁をへて、現在、日本政策投資銀行総裁という経歴を歩まれたわけですが、そういう中で、フツと大平流の何かを考えられることがありますか。

「自らに厳しく他人には寛容」が大平流

小粥 ありますね。何よりもまず人間として、まことに敬愛すべき、そして懐かしいお人であつたということです。それから、大平さんのご家庭、あるいは私の家内も含めて、大平邸に何となく集まっていた人たちの雰囲気というのは、たいへんファミリーアな温かさがあつて良かったですね。また仕える立場からすると、本当に有難い人でしたね。これは自分

の恥を話すようですが、こんなこともありました。国会開会中のこと、秘書官として随行していて、大平大臣が本会議場に入ってから出られるまで予定として二時間ほど待っている時に、ついちよつとだけとばかり、囲碁が好きな警護官と私が碁を打っているうちに、何と予定時間より一五分も早く大臣が議場から出られて、独りで車に乗って大蔵省へ帰ってしまったのです。慌てて部屋に戻って、これは鹹だなど覚悟して私は恐る恐る「大臣、申しわけありません」と申し上げたら、「君ら、なにしておった」と、それだけで終わりでした。本当に冷汗をかきましたが、大平さんの大きさを実感いたしました。思い出すことはまだいろいろありますが、終始「自らに厳しく、他人には寛容であれ」、これが大平流だった、とあらためて思います。

——小粥さんは、中曽根総理にまた頼まれて秘書官をされる、福田総理の秘書官もちよつとされたことがあるそうですが……。

小粥 三木内閣総辞職の後、福田内閣が五一年一二月に発足するわけですが、その時の総理秘書官として、福田さんの蔵相、経企庁長官時代に秘書官をつとめた保田博君が指名されました。ところが彼は、当時、厚生労働担当の主計官をしていますが、予算づくりの真最中なので直ぐに代えることができない。それで臨時の代役として大平蔵相秘書官を終わつたば

かりの私が、ちょうど一カ月間、内閣審議官という肩書で、福田総理秘書官を務めることになりました。当時、政治部記者の方々から「『大福蜜月時代』ならではの産物だね」と言われましたよ。ですから私は、図らずも大平、福田、中曽根の三君に仕えるという、珍しい記録の持主なのです。このお三方は、それぞれ派閥も異り、タイプも全く違いますけれども、しかし、いずれも本当の大物政治家でしたから、私は実に仕合せであつたと思つています。しかし、もともと政治の世界のことが全く分からなかつた私にとつて、最初の秘書官経験であつただけに、大平蔵相時代はとりわけ鮮烈な印象を持つております。

大平さんが亡くなられてから二〇年になりますが、現在の異常な赤字財政をご覧になつたら何と言われるか、政治家大平さんがあらためて顧みられて然るべきだと思ひます。

小粥正巳（こがゆ・まさみ）一九三二年、東京都生まれ。五六年東大法学部卒と同時に大蔵省に入省、七三年東京国税局間税部長、七四年七月、大平正芳大蔵大臣秘書官、七六年福田内閣審議官、七七年証券局資本市場課長、七八年主計局主計官、八二年近畿財務局長、同年一月、中曽根内閣総理大臣秘書官、八五年主計局次長、八八年主計局長、九〇年大蔵事務次官をへて、九一年退官。九二年公正取引委員会委員長、九八年日本開発銀行総裁、九九年から日本政策投資銀行総裁を務める。

福川伸次氏（元大平首相秘書官）に聞く

総理時代の思索と言動

—— 聞き手・阿部 穆

『去華就美』（大平財団・平成12年）所載。

平成12年1月18日電通総研会議室で取材。

大平総理の意向で総理秘書官に

—— 昭和五十三年一二月に大平内閣が成立するわけですが、また福川さんに秘書官をやつて欲しいという要請があるわけですが、これは総理自身の意向だったんですか、それとも……。

福川 それは私はよく知りませんが、後からいろいろ聞くと、当時、次官は濃野滋氏で、官房長は藤原一郎氏でしたが、森田一秘書官が人事の窓口をやっていて、そこらの情報を総

合的に両方から聞きますと、通産省は別の人を秘書官に用意していたようです。それを二度持つて行ったと言っていました。しかし大平さんがなかなか「ウン」と言わない、ということだったようですね。たしかに総理というと最後だから、使いやすいというか、気が分っている奴がいい、ということだったんでしょう。それで、本当かどうか知りませんが、話によると大平さんが「福川君はどうしているかね」と言ったという。

——その時は本省ですか、エネルギー庁でしたか。

福川 私は官房の企画室長をやっています、八〇年代の通商産業政策という全省庁を挙げてつくる作業の責任者でした。これは、七〇年代の通商産業政策というビジョンを、大平通産大臣の頃に、つくったわけですが、それから一〇年近く経ったので、新しいビジョンをつくらうということになって始まった作業です。通産省としては始めたばかりでしたから、別の人を持つて行ったのでしょう。しかし総理のご指名ならばというわけで「君、行ってくれ」ということになったわけですよ。

——それで秘書官に就任されたわけですが、就任されるにあたって、特別に総理から何かこういうことを頼むとか、言われたことがあったのですか。

福川 いや、特にこういうことをやってくれということはありませんでしたが、「まあ、

俺がこういうことになったんで、迷惑だろうけど、よろしく頼むな」という話でしたね。

——大平政策研究グループについての話は……。

福川 最初の時は、その話は出ませんでした。組閣の前から宏池会を中心に、その後の政策はどういうふうにしようかというような議論は、いろいろしていましたからね。そのうち、少しずつ政策グループの構想が具体的に出てきましたが、組閣のときに大平総理の口から特に政策研究グループの話は、出ませんでした。

——大平内閣は、五三年の一二月から五五年の六月まで実質一年半ですね。その間に、いろんなことがあったわけですけど、福川さんの担当された面では一番大きかったのは、東京サミットであったと思うのです。東京サミットには各国の首脳がくるわけですが、そこで一番大きな問題というのは、エネルギー問題、石油問題、特にジスカールデスタン仏大統領が提出した国別輸入目標の設定という問題であったわけですね。これは通産省がいろいろ苦労されたと思うのですが、何でこのような問題がジスカールデスタン大統領から提起されて、それで大平総理が苦悩されたか。その辺の経緯はどうだったんですか。

東京サミットでの大平首脳外交

福川　そもそもサミットというのは、第一次石油ショックの後にジスカールデスタン大統領が提案をして、石油ショックの対応策、その後の混乱に陥った世界経済——あの頃は長いトンネルに入ったといわれたわけですけれども——に、主要国がどう対応するかということとで始めたものです。それでだいぶ良くなって、福田（赳夫）内閣の時に、ボンサミットがあつて、日独機関車論というのがいわれて、七パーセント成長を福田さんが公約してくるわけです。これがなかなか実現ができない状況になっていて、それで東京サミットで批判をされても困るし、どうするか実は悩んでいたわけです。そうしたら、一九七八年の暮れにイランで革命が起こりホメイニ師が帰ってきて、パーレビ国王を追い出して、イランが石油の輸出を止めるという形で、第二次石油ショックに入るわけです。

したがって、そういう状況でしたから、ジスカールデスタン大統領にしてみると、石油問題で、サミットが明確な態度を示すべきだということになってくるわけです。ですから東京サミットに入る前から、ヨーロッパは相当の要求をしてくるかも知れないという情報は、少しずつあつたわけです。しかし、日本は石油の消費を抑えるとか、輸入を抑えるとかいうこ

とになると、日本の成長そのものが制約される、経済そのものがうまくいかない、ということがあるものですから、日本はアメリカと組んで、省エネ等を自主的に行うという形で乗り切ろうという考え方だったですね。当時、シュレジンジャー氏が、アメリカではエネルギー庁長官で、その人が少し早目に来日して、いろいろと交渉したところ、アメリカからは強い意見はなかったわけです。ところが後になってみると、米・欧で何かあったらしいということは分かるんですけども、日米で協力をすればサミットは乗り切れると読んで、省エネと石油備蓄をちゃんとやりましょうということで行こう、としていたわけです。

ところが、ヨーロッパのほうからみると、産油国からこれだけ刃物を突き付けるようなことをやられては、キチンと対応しなければいけないという意見があった。それはジスカールドスタンが非常に強く主張し、ドイツ、イタリアを引つ張って、是非そういうことにしようということでした。そういう動きがありそうだとすることは、何となく分かってはいたんだけれども、あんなに強く言うとは実は予測をしてなかった。それで、一日目が終わって二日目の夜、ヨーロッパ側がフランス大使館に集まって作戦会議をするということになって、そういう情報がちらちら流れてくるようになった。

—— 日本だけが蚊帳の外だったんですね。

福川　そうです。それで、いろんな人を通じて、少しずつそういう情報が夜中に流れてきました。そして、二日目の朝、向うは大統領たちが集まって対策を協議する、という情報が夜明けには明らかに became ですね。そして、産油国が供給を抑えるというのだから、消費国側も輸入量を抑えよう、そうでないと、いつまでたっても付け込まれるぞ、という考えです。ヨーロッパは、いろんな形の国際関係の長い歴史を持つ国だから、そう考えるのでしょうね。その当時は、もしそんなことをしたら、日本経済はメタメタになってしまおうという危機感があつて、田中六助官房長官は、「いや、これは大変なことになりそうだ」と言つておられました。朝七時ぐらいになって、私が今こういう雰囲気ですよと言つたら「そんなはずはない」と言つて、大平総理が烈火の如く怒りました。「外務省からそんなこと（情報）ないぞ」と言われ、それはガセネタだという感じでしたね。しかし、六助さんのほうは、「いや、そうじゃないかも知らんぞ。フランスなら、それくらいのはやるかも知れない」ということで、「もし本当だったら、これを呑めば大平内閣は潰れるね」というくらいな危機感を持っていました。したがって、その情報を確認できないまま赤坂離宮へ行く、ということになった。

案の定、「規制をやれ」となる。そしてアメリカも賛成に廻ったわけです。そして日本が

孤立無援となった。それは困る困ると言っただけでも、「それなら日本は、いくらならいいんだ」という助け舟を、確かカーター大統領が出したんですね。そして、当時、経済企画庁がつくった五カ年計画というのがあって、それに基づいて、大平総理が「それなら六九〇万バレルというならできる」と言ったら、「それでいいじゃないか」とカーターが言ってくれて、「それで行こうよ」ということになった。一つジスカールドスタンが、「六九〇万バレルでいいけれども、できるだけ減らす方向で努力してくれよ。努力ぐらいはいいだろう」ということになって、下限が六三〇万となり、六九〇〜六三〇という二本建てになって合意ができた、というわけです。ですから、ヨーロッパの「目には力には力を」という考えで、ジスカールドスタンが引つ張ったということであつたと思いますね。

—— 田中六助さんの遺された原稿を拝見しますとね、赤坂離宮の中の游心亭で食事をしてる時に、皆さんが日本食をおいしそうに食べているのに、大平さんだけが食べなかつたと。「何で食べないんだ」と誰かが質問したら、「いや、もう石油のことを考えたら、食事も喉に通らないんだ」と言っただんで、大爆笑になって「そんなに心配しなくていいよ。われわれも、あなたの考えに近い線で助け舟を出すんだから、ゆっくり食事を召し上がってください」という話になって、それで、その時に「これで打開の道が開けたな」と思ったと書いて

いるんですが、そういうシーンがあったのですか。

福川 そうだったようですね。最後にカーター大統領が助け舟を出すのは午後ですけども、午前中は激しいやり取りをやって、それで食事に行ったわけです。それは、大平総理ご自身も「食事は喉も通らんよ」と言ったんだということを言っていましたね。後で伺うと、その日の朝、「血の小便が出たんだ」と言っていました。「昼食は本当に上の空、飯も喉に通らんという心境だった」とおっしゃっていましたね。「だけど、そんなに心配することないよ」と皆に言われたんだとも、言っていましたね。

——カーター大統領との友情というのが、ここで非常に大きな効果があったんでしょうか。

福川 その前の四月末から五月はじめの連休にワシントンに行っているわけです。その時にアメリカは日本にとって一番大事な国だから、日本の国土なり施設なりを是非、使ってほしいということ、日米安保体制の堅持ということ、合意をしたわけです。当時、電電公社の調達問題がより深刻になっていて、宮澤さんが尖兵として地ならしに行かれたりしました。それが相当ひどくなると問題だということがあったんだけれども、これはそんなに深刻にならずに、首脳会談は終わりました。そこで、大平・カーターという関係は、かなり理解

し合った。それが七月のサミットにプラスに働いたということではないでしょうか。

——分かりました。それで今度は直接、お役所の仕事ではないんですが、いわゆる政争のほうに入っていくわけですが、この五四年の九月から一〇月にかけての総選挙で自民党は議席を減らすわけですね。それに伴って党内からの反対の声が高まってきて、いわゆる大福決戦ということになって、そこに至る四十日抗争というのがあったわけですが、この頃は小平さんはまだ元気だったんですか。

第二次大平内閣での長い外遊の実態

福川 お元気でしたですね。

——つまり、断乎、政権は譲らないと。例えば「辞めろ」ということは、死ぬということか」と言い返したり何かしている。割合、元気だったわけですが、選挙に負けた直後は、しばらく考え込んでいたんですか。

福川 私も総理のお供をして自民党本部に行っていました。開票が進んで行って最初は非常に良かったんですけども、開票の後半になると、伸び悩むわけです。そして、「大変な

ことになったな。こんな筈じゃなかったが」と言われました。当時は、一般消費税問題が、選挙中もいろいろ尾を引いていましたから、「やっぱり、こういうことか」と、一時はかなり弱気になった時期がありました。しかし落ち着いて考えてみると、議席は減つたけれども、第一党であることは間違いない。そうである以上、別に自分は責任をとることはない。この第一党という信任に応えるべきだ、という考えになって行くわけです。もちろん、その過程では田中角栄さんとも連絡を取り合っていましたし、それから、ここでは負けられないという気持ちに、だんだんなったように思います。

—— 福田さんと大平さんの両方が総理候補になって、自民党の二人が国会で争うという形になって、結局、大平さんが勝つわけですが、その頃は、かなり強い意志で……。

福川 ちよつと気が弱かったのは、最初の一日か二日でしょうね。選挙が終わつて議員たちが東京に戻ってくる頃には、もうこれはキチンとやらないといかんという決意になっていた、と思います。

—— で、乗り越えて第二次大平内閣ができるわけですね。それで今度は、いよいよ最後の段階になるわけですが、長い外遊がありますね。この時は、福川さんはご一緒に行かれたのですか。

福川 ええ、一緒に行きました。

—— 一番の問題は、やっぱり疲れから、メキシコだと思うのですが、どうなんですか。

福川 まあ、そうかも知れませんがね。あの外遊はアメリカからメキシコへ行って、カナダへ行って、そしてチトー大統領が亡くなったのでベオグラードへ行き、ボンに回って日本に帰ってくるということですから、結局、二週間近くになりました。

—— メキシコは、エネルギー問題で、日本の総理がきてくれれば何とかする、というよ
うなニュアンスが伝わっていたように聞いたのですが……。

福川 そうですね。当時、三〇万バレルの原油を供給する用意がある、というふうに伝えられていて、総理が行って話をすれば、それは可能だという情報が松永信雄駐メキシコ大使から寄せられていました。当時、永山時雄さんという通産省出身のシエルの社長も、しきりにそういう情報を持ってきました。そして、行けば大丈夫と言われたので、行くことにしよう、ということになった。アメリカで一応、カーター大統領との会談をやったのですが、その頃はまだテヘランのアメリカ大使館員人質問題が解決されていませんでしたので、イランから油を買う、買わないが問題となった時期があったのですが、その頃はもう日本はイランから油を買わないことを決めた後なので、比較的アメリカとの交渉はうまくいったのです

ね。

しかし油が必要なので、メキシコに期待をもって行ったわけです。そして飛行機に乗ってワシントンを立てた頃から、少しずつアメリカに寄せられた情報から、どうもメキシコ政府はそれほど積極的ではないらしいということを伝えてくる人が多くなりましたね。新聞記者が「どうもそうでないみたいだよ」という話になって、到着してみてもメキシコのロペス大統領と会談してみると、決していい話が出てこないのです。当時、経済協力などお土産をいくつか持って行ったわけです。それで、どうもメキシコは油を出しそうもないと。そうすると、この経済協力の案件はどうするのかというので、当時、大蔵省の加藤隆司国際金融局長、通産省の藤原一郎通商政策局長、経済企画庁の井川博調整局長、それに外務省の鹿取泰衛外務審議官が集まって御前会議になったのですが、局長同士でまとまらないわけです。というのは、経済協力をこれだけ用意してきたんだから、今ここで出しておけば、いずれいい返事がメキシコからくるから、協力はやっておくべきだという意見と、他方、油がもらえないなら出すわけにはいかない、そんな甘いことをしてはいかん、という意見で、まとまらないわけです。一二時になり一時になりで、総理の前で各省局長があんなに大喧嘩をするのを、私は初めて見ました。結局まとまらないで……。

——それを大平さんは黙って聞いていたわけですか。

福川 そう。黙って聞いていましたね。そして、もう少し先方の条件が熟すれば出すということにして、結局、そう臭わせて出さないで帰るといことになるわけです。それで、大平総理は、ああいう人ですから、愚痴は言いませんでしたが、後から松永大使から長文の詫状がきました。それでカナダへ行くわけですが、メキシコからオタワへ飛んでいる飛行機の中で、チトー・ユーゴ大統領の死亡の連絡が入った。それでオタワとヴァンクーバーで日加首脳会議をやつて、大平総理は、「俺、帰るよ」と言われたが、伊東正義官房長官から「どうしても行つて下さい」と言われて、あの時、加藤（紘一）官房副長官が付いていましたが、チトー大統領の葬式に参加することになったのですね。

——福川さんはユーゴまで一緒にいらつしやつたのですか。

福川 行きました。葬儀のあとシユミット西独首相と会うわけですが、二人はたいへん仲良しでして、「いい話だったな」と大平総理は言っておられました。メキシコという国は、ハイランド（高地）ですし、その前に四十日抗争で皆さん苦労していましたから、やつぱり疲労の極であつたことは確かですね。それに長い外遊で地球をぐるぐる回ることになつたわけですから、たいへんでしたね。

——それで旅行は終わりました、いよいよ政局はえらいことになって、（内閣）不信任案を食うわけですね。解散か総辞職かという時に、閣僚が閣議室に集まるわけですね。その時に、『回想録・伝記編』によると福川秘書官が（院内の）総理室へ入って行って、「閣僚がそろいました。閣議をお願いします」ということを申された、というふうになっていますが、そうなんですか。

解散から衆参同日選挙への心境

福川 そうでした。その時には、竹下（登）大蔵大臣と伊東官房長官がご相談になって、「解散する」という話をされておられました。不信任になった時の大平総理の顔というのは、本当にいま思い出しても、硬直したというか、血の気の失せたというか、生気のないあんな顔を見たことは全くなかったですね。声を掛けても硬直していて返事がこないんじゃないか、と思ったぐらいでした。そして「閣議室へ」、「うん」ということで行かれた。その時は、もう本会議場の中でメモが回って、閣議をやる、そして解散ということに閣僚の意見は一致していたのではないのでしょうか。

—— 院内の閣議室というのは、細長い部屋ですね。官邸の部屋と違って……。

福川 そうです。

—— あれ、総理は真中に座るんですか。

福川 総理は一番奥に座るんです。窓際のところ。

—— それで解散になって、その時に大平さんは何か感想みたいなものを漏らしていましたか。それとも何か「しょうがないな」というようなことですか。

福川 やっぱり最初は、福田派、三木派に対して不信感が非常に強くて。もちろん、解散して選挙に入るに当たって、党内にケジメ論がありました。党内からケジメをつけて公認するな、という意見が側近からも出てくる。福田派はA級戦犯だという意見さえありました。最初のうちは、そういうことでしたね。当時、政調会長が安倍（晋太郎）氏で、翌日、安倍さんが政調会長を辞めると、言いにくられるわけですが、大平総理は安倍さんに対してあまり口は利かず、「しょうがないね」ということで会談は終わりました。一日たち二日たちするうちに「自民党のために」という意見が別のほうから少しずつ出てきて、「公認しない」とか「除名する」とかいうことには結局ならず、もう一回、自民党全体として選挙でケジメをつけようというムードになりました。で同日選挙でしたから、両方で燃えていて、戦犯

論は何となく消えて行きました。

—— 別な意見というのは経済界からですか。

福川 自民党が一本化してやってもらわないと困るという声ですね。それで、党内も落ち着いてくるということになりました。

—— それで、いよいよ公示ということになって、最初に参議院が先行するんだと思うんですが、公示当日の秘書官の当番は於久（昭臣）さんだったんですか。

福川 選挙の時は、必ず於久さんが警備の関係で全部ついて行くことになっていて、それにもう一人（秘書官の）誰かが交替でついて行く。だから二人体制で行くということにしました。それで、私がつままたまその時は一緒に行っていた。

—— 大平さんは最初、（自民）党本部で演説をやられた時は、それ程でもなかったんですけど、だんだん具合が悪くなってくるわけですね。

福川 そうですね。最初の朝の時はそうでもなかったんですが、新宿の演説時は全体で一五分ぐらいの予定の話の三分の二ぐらい行ったところで、声のトーン（調子）が変わり、声が出てくなくなつて、手すりにつかまるような感じになりました。だけどとにかく終わりますで喋つて、遊説車から降りて、総裁車に乗ったら、大平総理が「喉の奥が痛いんだ」と言う

わけですよ。そのうちに脂汗が出てきて、「苦しい」と言うんですよ。それで、党本部へ行つて食事をするということになつていたから、とにかく戻つた。そして総裁室のソファに横になり、「暑い」と言つて、ワイシャツを脱いで、しばらく寝ていました。私は大平総理が以前に軽い狭心症をやつたことがあるということを知らなかつたものですが——森田（二）秘書官は常時ニトロ口を持つていたそうですが——これは相当、悪そうだなと思ひ、「午後の遊説は止めましょう」と言つたわけですよ。そうしたら大平総理は「そんなことをしたら大変だ。もう人を集めているんだろう。だから俺は行くよ」と言つて、食事もほとんど食べないで、たしかメロンを二切れかそこら食べたくらいで、出て行きました。

私は「これはいかん」と思ひ、医者の手配とかをするために午後の遊説には付いて行かないことにして、瀬田のお宅へ行きました。番記者が歸つてくる前に、掛かり付けの医者（鶴巻先生）に入つていただいていたわけです。そして、六時半頃に大平総理がぐつたりして歸つてきたわけだけど、医者は「これは危ない」と言われた。それで、すぐ心臓病関係の医者何人か呼び込むことになるわけですが、その時に医者を番記者に見つからないようにするために、裏から入れるという算段をするわけです。「絶対安静、すぐ入院」というのが医者の判断でした。三人ぐらい医者を呼び入れましたね。

——葛谷（信貞）さんがヘッドだったですね。

福川 そうですね、主治医ですから。それから朝日生命成人病研究所の藤井潤さん、もう一人は虎の門病院の山口洋さんです。それで虎の門病院へ入院させるわけですけども、当時から、救急車を呼ぶと全部、新聞社に盗聴されていると聞かされていましたので、救急車はやめて民間の寝台車を呼んだんですよ。民間の寝台車というのは、結構あるんです。それを、私邸から少し離れた車庫みたいな所に入れておきました。それから、SPは付けないわけにはいかないので、吉崎良宏さん（首席警護官）をこっさり呼んで、一人だけ付けました。そして一二時過ぎて番記者が「何もありませんね」ということで帰った後、寝台車に医者が付いて、吉崎さんが助手台に乗って虎の門病院に向かうことになりました。その時に、大平総理は「こんなことになっちゃったよ。でも、帰ってくるからな」とお手伝いさんに言っていました。

——福川さんは、その時、一緒に行かれたんですか。

虎の門病院での大平総理の容態

福川 いや行きませんでした。明日の遊説の取止めについて、新聞各社と連絡を取らなければならぬ、ということでしたので。於久さんと吉崎さんが虎の門病院へ行った。

——取止めについて各社は、どうしたと言ったでしょう。

福川 とりあえず過労のため数日間、休養ということにしたのですが、思わぬことが起りました。共同通信社が虎の門病院の側でしょう。後で聞いたのですが、共同通信の記者が帰りがけにSPに行き会っちゃって、「あんた、何でこんな所にいるんだ」ということになったのだそうです。それで、これはおかしいということになったのです。病気とか一切言わずに、過労だからとか遊説取止めと言ったのですが、それで夜明けまで大騒ぎになりました。結局、入院と言わざるを得なくなったのですが、そこで、入院の理由をどう言うかがまた問題になりました。「一過性の虚血症」という、嘘ではないが真実でもないという言い方を、医者に認めてもらって、入院して療養すると発表することになった。それから、ベネチア・サミットに行くか行かないかという騒ぎに移って行くわけです。

——総理番の記者たちと二分ぐらい記者会見をやりますよね。あの時は、福川さんはお

られたんですか。

福川 いました。

——その時は、どんな具合でしたか。一応、浴衣みたいなものを着て、写真もとる、総理番が「代表して見舞いにきました」「おう、ご苦労さん」と。その時の応対はどうでしたか。

福川 あの時は、だいぶ元気になって、医者も「五分ぐらいなら、いいでしょう」ということで、質問は多分三分ぐらいだったと思いますけれども、それには比較的落ち着いた応対をしていて、「ああ、だいぶお元気ですね」というのが番記者の印象でした。

——医者は、それも「疲れるといけないから、止めたらどうですか」というようなことを言ったとか……。

福川 医者は、そんなことはないほうがいいと言うんですけれども、最後は「まあ短時間ならやっついていいでしょう」ということでした。

——福川さんが傍目でみておられて、少しずつ落ち着いてきたというか……。

福川 そんな感じでした。少しずつ落ち着いてきて、顔色もだんだん良くなってきて、結構いろいろな話もしましてね、「おい、石油の値段はどうだ」とか「物価は上がっている

か」とか尋ねられました。

——それで二二日の夜は、木村（貢）さんと於久さんが交替であそこ（病室）におられたわけですが、福川さんはどこに……。

福川 私は自宅におりました。それで容態急変という電話があつて、夜中の一二時過ぎに、病院へとんで行きました。私の家にも新聞記者が毎晩きていましたから、「今日は何もないですな。さようなら」と言つて帰つてもらつてから、一五分ぐらい後に電話がかかつてきたのです。

——それで駆けつけた時は、もう……。

福川 人工呼吸をやつていました。それで（総理大臣）臨時代理の手続きをしなければいけないわけですね。これを、生きておられるうちにしておかなければなりません。かねてからの意向に沿つて「伊東正義を臨時代理として指名する、大平正芳」という書式をまとめました。

——二度にわたつて秘書官を務められて、感じられたこともいろいろあつたと思います。が、福川さんが通産省出身だからというわけじゃないんですけれども、大平流の経済哲学というのは、側で見ておられて、いろいろ印象深いものがあつたと思うんですが、また今日の

に生きるものもあると思うんですが、どんなふうな感じでしたか。

「複眼思考」で「思索の人」だった

福川 最近よく言われるようになりましたが、自己責任、自律判断というものを、経済運営、経済に携わる者は、重視すべし、ということだったと思います。あの頃、「護送船団」といつてみたり「横並び」といつてみたりしていますけれども、今から思うと、当時は、政府には業界の面倒を見てやりたいという気持ちがあり、民間には政府に寄り掛かりたいという気持ちがあったりする中で、自己責任、自律判断で、経済主体は動いて行くべきものであるという意見は新鮮でした。政府というものは、必要最小限度のものしか関与をしない、これが経済社会が一番うまく行く源泉だという認識を持つておられたような気がします。

—— 政府は割合、後ろのほうに控えていて、民間主導にしないと……。

福川 その代わり民間は責任を持つ。失敗をすれば責任をとるということで、その持場でキチンと判断と責任を全うして行くというのが、経済はうまく行くんだという信念のような気がしますね。それから、絶えず新しいものに挑戦をして行こうという気持ちを持つ

ておられた。技術政策、技術力を重視し評価をしておられた、という印象は受けました。多分、新日鉄の合併問題も、そういう技術力ということで大平総理は一番、認識していたように思えますね。残念ながら大蔵省が一番、最後まで業界のお節介をやいたので、今、金融が非常におかしくなってしまったと言えるかもしれません。ですから、そういう意味では、通産省は大平総理に助けられたというところはありますね。

——それからもう一つ、側におられて感じた、人間・大平正芳というのは、福川さんにとっては、どういふふうな感じの人でしたか。あるいは福川さんが大平さんからインプレッスされたことというのは……。

福川 絶えず事象をできるだけ客観的に見て真剣に考える方だったと思います。目線を変えて高い所から見たり低い所から見たり、それで絶えず事態の先行きを予測して、対応は慎重に考えて行くという、言ってみれば深謀遠慮というか思慮深いというか、物をよく考えていくという「思索の人」でした。今、政治家の中で、理念がある政治家が少ないというけれども、大平総理は、心棒がしっかりしていて、非常に思慮深い、そういう印象を非常に強く受けます。「複眼思考」という答えもあるかも知れません。思い込みとか、人に言われたから動くということはしない方です。それから表現を非常に大事にする人でした。自分の思想

をどうやったたらうまく人に伝えられるか、ということを決えず考える人でした。そういう意味では、理念があり、思慮深く、表現に説得力があるという、政治家にとつて一番大事な資質を持つておられた方であった、と思います。

福川伸次（ふくかわ・しんじ）一九三二年、東京都生まれ。五五年東大法学部卒と同時に通商産業省に入省。六八年大平正芳通産大臣秘書官、七八年大平内閣総理大臣秘書官、八四年産業政局局長、八六年事務次官をへて、八八年退官。八九年野村総合研究所顧問、九〇年神戸製鋼所副社長、九四年電通総研社長兼研究所長、九九年電通顧問兼電通総研研究所長、現在に至る。著書に『21世紀・日本の選択』『産業政策』など。

けん てき こう

硯滴考 [17]

令和六年九月吉日 発行

発行者 公益財団法人大平正芳記念財団

〒102-0082

東京都千代田区一番町 22-4 一番町館 202 号

TEL : (03) 3230 - 2213

FAX : (03) 3230 - 2214

URL : <https://www.ohira.org>

